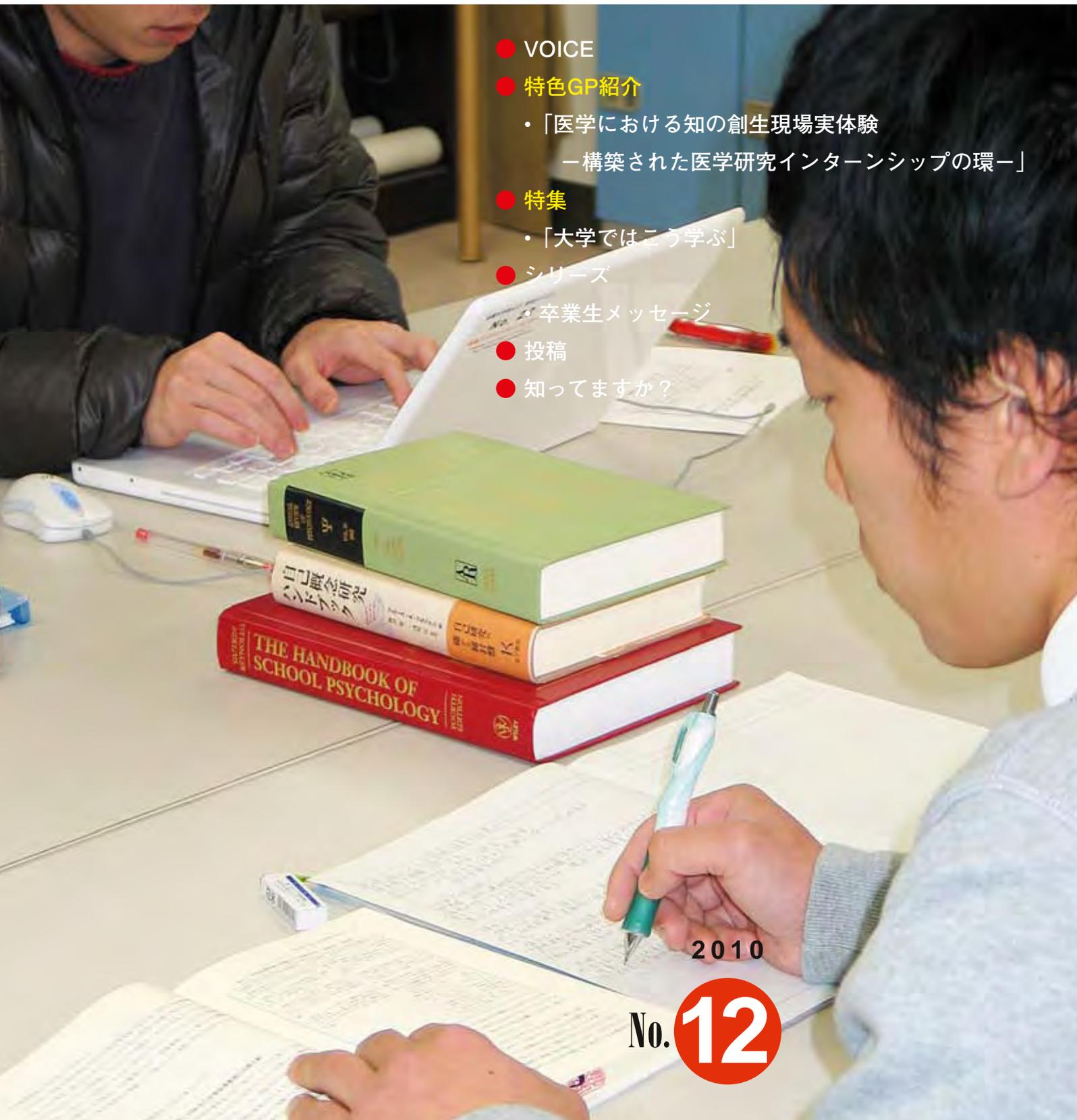


OU-VOICE

教養教育 ● magazine

- VOICE
- 特色GP紹介
 - ・「医学における知の創生現場実体験
—構築された医学研究インターンシップの環—」
- 特集
 - ・「大学ではこう学ぶ」
- シリーズ
 - ・卒業生メッセージ
- 投稿
- 知っていますか？



2010

No.

12

目次

VOICE

アドミッションセンターの活動 アドミッションセンター長 土屋 友房	1
--------------------------------------	---

特色 GP 紹介

医学における知の創生現場実体験 –構築された医学研究インターンシップの環– 医歯薬学総合研究科 (医学部) 教授 二宮 善文	4
---	---

特集

「大学ではこう学ぶ」 大学の学びについて～大学は人生の夏休みか？～ 法学部 法学科 3年次生 吉野みなみ	8
体験的・大学での学びかた 社会文化科学研究科 (法学部) 教授 藤内 和公	9
自ら形づくる大学生生活 環境理工学部 環境管理工学科 3年次生 石村桂一郎	10
肩肘を張らずに自分流で、でも初心を忘れずに 環境学研究科 (環境理工学部) 教授 三浦 健志	11
大学での学び方 農学部 総合農業科学科 3年次生 狩野 典香	12
山に登ろう 自然科学研究科 (農学部) 准教授 西野 直樹	13
「大学における学び方」 –ラーニングチップス交換記– 薬学部 創薬科学科 4年次生 藤田 真弓 医歯薬学総合研究科 (薬学部) 教授 竹内 靖雄	14

シリーズ 卒業生メッセージ

OU-Voice 卒業生ページによせて フリーアナウンサー (ラジオ:おかやま朝まるミュージックアフター9「3月現在出演中」) 平成5年 文学部哲学科卒業 遠藤 寛子	16
--	----

教育から学ぶ プロサッカーコーチ (ファジアーノ岡山FCジュニアユースチーム監督 元トップチームGKコーチ) 平成9年 教育学部中学校教員養成課程保健体育専攻卒業 妹尾 真人	17
--	----

投稿

海外の教育紹介 フランスの教育制度 社会文化科学研究科 (文学部) 講師 ミシェル・ドボアシユ	18
---	----

知ってますか？

Gmail の利用促進について 総合情報基盤センター 客員教授 稗田 隆	20
---	----

編集後記

アドミッションセンターの活動

アドミッションセンター長

土屋 友房

大学が発展していく上で大切なことがいくつかあります。その中の一つが、優秀な高校生等に受験してもらい入学してもらうことです。18歳人口が減少していく中で、優秀な若人に入学してもらうために、各大学はいろいろな面で工夫や努力をしています。アドミッションセンターが行っている活動は、この「優秀な高校生等に受験してもらい入学してもらう」ことを目指すものです。そのために、アドミッションセンターは次の二つの活動を行っています。

- 1) 高校生、高校教員、保護者等に対する広報活動
- 2) 入試の企画と実施

1) 広報活動

アドミッションセンターの教員は、年間を通して業務に追いまくられ、あちらこちらを飛び回っています（という印象を私は持っています）。本学アドミッションセンターは2004年に設置され、私はその時に副センター長を仰せつかりました。それ以来6年間、私は高校生等に対する広報活動のために学内外を飛び回ってきました。センター専任教員の方々（4名）は私以上にあちらこちらを飛び回り、熱心に広報活動を展開しています。1年の内で、広報活動で特に忙しくなるピークが5月末から6月です。毎年5月末に次年度入試に関する本学の基本方針が決まります。これが決まるとすぐ、高校で進路指導を担当しておられる先生方に対する説明会を開催します。2009年は、表1に示す近隣市で「進路指導担当者入試説明会」を開催しました。

表1 2009年度高等学校進路指導担当者入試説明会

会場	実施日
岡山市	5月29日（金）
神戸市	6月1日（月）
姫路市	6月2日（火）
山口市	6月3日（水）
福山市	6月4日（木）
高松市	6月5日（金）

この説明会では、本学の教育と研究の特色に関する説明、および次年度入試に関する説明（特に変更点を中心に）を行っています。高校の進路指導の先生方は大変ご熱心で、毎回多くの先生方にお集まりいただいています。また高校の先生方から忌憚のないご意見をいただき、本学の入試制度等を改善する上での参考にさせていただいています。

6月後半の日曜日には、「教育と入試説明会」を本学で開催しています。この頃には次年度入試に関する主要事項をまとめた「入学者選抜に関する要項」が完成しており、それを参加者に配布し、本学の次年度入試に関する確定版の最新情報を高校生等に説明しています。この説明会では、本学の教育と研究の特色、入試の概略（特に前年度からの変更点）に加え、サークル活動の紹介、学部別個別相談などを行っています。サークル活動の紹介では、実際にいくつかのサークルの実演があり、迫力のある紹介となっています。

6月の後半から7月にかけて、中国四国各地と兵庫県で「学外オープンスクール」を開催しています（表2）。学外オープンスクールでも、まずアドミッションセンター教員が本学の教育と研究の特徴を説明しています。その中で、1) 全国の学長の相互評価において、本学は教育に関して高い評価を受けていること（朝日新聞社の大学ランキングで2008年版では国立83大学中の1位、2009年版では

表2 2009年度学外オープンスクール

会場	実施日
姫路市	6月20日（土）
徳島市	6月20日（土）
福山市	6月20日（土）
神戸市	6月27日（土）
高知市	6月27日（土）
山口市	6月27日（土）
松山市	6月28日（日）
高松市	6月28日（日）
津山市	7月14日（火）
松江市	7月16日（木）

4位)や、2)注目すべき特許の件数に関して、本学は東大、京大、阪大等を上回り大学で4位(朝日新聞記事)であることなどを説明しています。

学外オープンスクールの難しさの一つは、同じ都市、同じ時期に学外オープンスクールを開催するにも関わらず、年によって大盛況であったり、参加者が極めて少なかったり、ということが起こることです。事前にその地域の学校行事や模擬試験の予定等を調査し、なるべくかち合わないよう日程を組んでいます。それでもこのようなことが起こることがあります。たまに空振りがあっても、めげずに頑張ることが大切であると思って広報活動に取り組んでいます。

高校生等に対する本学の最大の広報活動は、8月のオープンキャンパスです。2009年は8月3日(月)と4日(火)に開催されました(図1)。本学オープンキャンパスの参加者数は毎年増えており、今年は初めて1万名を超えて、12,000名以上となりました。

オープンキャンパスの内容も段々多彩になってきています。各学部の説明会に加え、「岡大情報発掘コーナー」と題して、副学長が案内するキャンパスツアー(本学の歴史資産を中心としたツアーや屋上からのキャンパス案内)、学生サポート(入学料や授業料の免除、奨学金、課外活動、女子学生寮)、入試情報(ここでしか聞けない入試の話など)、海外留学案内(個別相談、海外留学の紹介)、外国語

教育案内(外国語についての個別相談)、就職サポート(岡山大学のキャリア支援、学生の就職状況、在学生による就職活動体験記)なども行われています。

8月後半の週末と9月後半の休日には、本学で進学相談会を行っています。今年は新しい試みとして「本学教員による教科別入試対策セミナー」を行いました。このセミナーは高校生に大変好評でした。

また、他大学と合同の入試説明会や相談会も行っています(表3)。

表3 他大学との合同説明会

会場	実施日
中国地区国立大学合同入試説明会(大阪)	7月31日(日)
東京大学主催主要大学説明会(広島)	8月9日(日)
東京大学主催主要大学説明会(大阪)	10日(月)
東京大学主催主要大学説明会(岐阜)	17日(月)
東京大学主催主要大学説明会(東京)	23日(日)
中国四国地区国立大学合同入試セミナー(岡山)	9月6日(日)
東京大学主催主要大学説明会(福岡)	20日(日)

これらの説明会では、各大学がそれぞれの大学の特徴や入試制度について説明したり、各大学のブースに来た高校生や保護者への個別説明、個別相談を行っています。東京大学主催の説明会には、これまでも西日本の会場の場合には参加していましたが、今年は初めて東京会場にも参加しました。東京会場でもそれなりの反応があったようです。

図1 2009年度の岡山大学オープンキャンパス



オープンキャンパスの総合案内センター



副学長が案内するキャンパスツアー

この他にも新聞社主催の大学説明会、受験産業主催の説明会や相談会が年間数十回開催されています。アドミッションセンター教員が手分けして参加し、本学に興味を持ってきている受験生やその予備軍、保護者、教員等に対して説明や相談を行っています。平均して一人あたり年間20回、学内外の説明会・相談会に参加しています。

さらに、センター教員は手分けして高校訪問を行い「優秀な受験生」を獲得するための「営業活動」を行っています。本学に受験生を送ってくれている中国四国地区の進学校を中心に訪問していますが、遠くは鹿児島県から岐阜県、愛知県に及ぶこともあります。また予備校も訪問しています。一人あたり年間20～50校を訪問し、優秀な受験生を集めるべく必死に努力しています。高大連携事業の一環として、高校生が集団で本学を訪問することもあり、大学の概要についてセンター教員が手分けして説明を行っています。前の教育・学生担当理事、田中副学長（現企画・総務担当理事）から、「アドミッションセンターは岡山大学の営業第一課」と言われましたが、正に「受験生（と保護者、高校教員）に対する岡山大学の営業第一課」として、センター教員は西日本各地を飛び回り本学の広報・宣伝活動に励んでいます。

2) 入学試験の企画と実施

入学試験の企画と実施に関しては、機密事項に関する事柄が多いので、多くは記しません。

本学が行う入試は多彩であり、AO、推薦、前期、後期等があります。各入試のやり方については学部毎に統一されていることが望ましく、高校側からもわかりやすい入試制度を求められています。しかし、残念ながら本学の入試の一部は誠にわかりにくく、これをわかりやすい形にまとめることが今後の課題です。

入試に関する今年の大きな話題は、新型インフルエンザの大流行に伴う追試験の実施です。国立大学は原則的に入学試験の追試は行っていません。しかし社会のさまざまな面で危機管理や緊急時対応が問

題にされるご時世です。今回の新型インフルエンザの大流行は、1週間の推定患者数が150万人を超え、累計患者数は1,000万人に近づいている状況（2009年11月22日現在）です。正に「緊急時」に相当する状況であり、国立大学協会や文部科学省はこの緊急事態に対し、22年度入試に関する特別措置として追試験の実施を決め、各国立大学に追試の実施を要請しました。本学もこの方針を決め、学長から本学の全ての入試について追試験の実施が指示されました。AO、推薦、前期、後期などの学部入試と大学院入試について、公表している試験期日のそれぞれ1週間後に追試が行われる予定です。ただし、今回の追試措置は新型インフルエンザの大流行に伴う緊急時対応なので、追試の対象となるのは、新型インフルエンザの感染者とその疑いがある受験生に限られます。

12月から3月にかけてアドミッションセンター（と入試課）が多忙を極める、もう一つのピークが来ます。入試の実施です。12月から1月にかけて、AO入試、推薦入試、センター試験が、そして、2月に前期入試、3月に後期入試があり、さらにそれらの追試もあります。入学試験は適正・公平に行う必要があります、どのようなミスも防がなければなりません。そのため、緊張の時期が続きます。この緊張の期間が終わり4月になると、入試のまとめ作業があり、新年度の入試広報の準備が始まります。

入試関連業務は1年間の限られた時期だけの仕事のように思われがちですが、アドミッションセンターの教職員（と入試課の職員）は1年中忙しく働き続けています。専任教員の内の3名と私は、アドミッションセンターの仕事に加え、大学院・学部における通常の教育・研究活動も行っており、誠に忙しい日々となっております。

医学における知の創生現場実体験

—構築された医学研究インターンシップの環—

医歯薬学総合研究科（医学部）教授

二宮 善文

● 現在わが国の高等教育では、個性輝く大学づくり、国際競争力の強化、教養教育の充実等が求められています。大学における教育の質の充実や世界で活躍し得る人材の養成が重要な課題となっているなかで、大学教育の改善に資する、特色ある優れた取組として、2007年に特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）に応募し、全国で47件のうちの一つに採択されました。3年目の最終年度を迎え、その効果と収穫を顧みて、発展的方向性を見いだしてみたいと思います。

3年次に3ヶ月間、医学研究の実体験をする

日本の医学教育の中で何が求められているかを考えると、目を見開いて生き生きとした目的意識を持ち「自ら考え、発信し、行動する」医学生ではないかと思えます。高校までの受験世界を乗り越え、大学の自由な雰囲気に埋没し、十分な学習時間を持たずなんとか単位をクリアし、国家試験に合格して医者になります。ところが、医者になると同時に担当の重症患者の持つ難問を抱えて、文献を調べるため英語漬けの世界に入り、徹夜で論文を読んで、翌朝多くの外来患者さんに接する毎日となり、自らの時間を持てなくなります。このような世界になることは、その立場にならないと、自分のものとして意識できないものです。したがって自らの過去を振り返って、医学生の中に真に何が必要かを考えると、医学研究の産出（知の創生）を現場で実体験し、その経験をもとに医学における自らの居場所を学生のうちから探し始めることであると考え、本プログラムを構築しました。この居場所探しは、総ての医者が生涯に渡って共通に有している究極の難題であり、どの段階の医者であっても追求しなければならない問題です。

医学部3年次生が3ヶ月間、他の授業のない状態で、この医学研究インターンシップに入ります。どこの研究室に？ 医者を目指したときから興味を持っていた研究室に行くことも可能です。実際には、医学部の46研究室と密接な関連のある世界の研究室が候補として挙げられています。どうやって研究室を探す？ ガイドブックにリストアップされている研究室の研究内容と自らの研究希望を照らし合わ

せ、窓口研究室を訪問し、情報を入手することから始まり、種々の条件（英語、目的意識、先方の情報入手の程度、人物、経済状況面接等）をクリアすると行き先が決まります。そして3ヶ月の研究漬けの生活が始まります。

医学研究の神秘の世界に入り込む

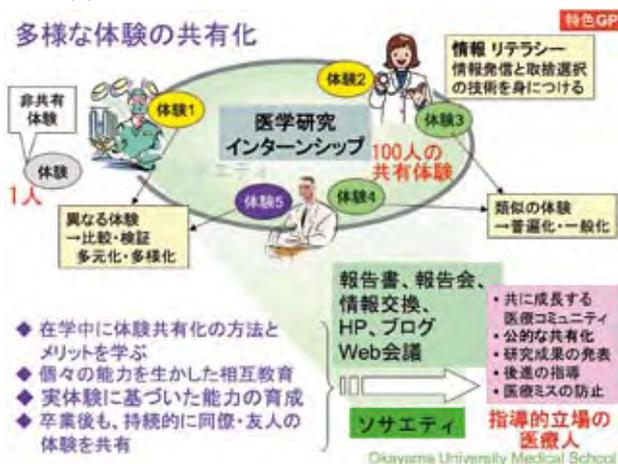
3ヶ月指導してもらうことになる研究者との共同(?)生活では朝の始まりから研究者に合わせなければならないし、研究者が徹夜するときには、一人だけ帰宅する訳にも行きません。しかし、時には研究者とともに真夜中の新発見の場に立ち会い、神秘のベールが取り去られる瞬間の喜びを共有できることもあります。なぜこの研究者はその研究をしているのか、背景、意義、その究極の重要性と効果を理解することができ、研究活動がどのように可能となるか、研究室の組織、研究費獲得と社会の中での関わり等の背景の問題、さらに国内外の学会に参加する機会が得られれば、その雰囲気を知ることができます。これらを通して、単なる early exposure（早期体験）の域を超えて、真に医学研究の世界に触れることができます。医学がそのような医学研究の積み重ねででき上がっていることを、実践して初めて実感することができるのです。

学生の社会性を涵養するための工夫がある

配属先の選定にあたり、学生は自ら多くの選択可能な研究室の研究内容を調べ、目的の研究室に到達します（これらは、希望の研究と情報収集能力、取捨選択能力、自己表現力、自己決定力等と密接に関

係します)。そして海外派遣を選択（自らの動機、理由を明確にすること、その根拠を明確に表現できること、競争的環境下での自己表現力等が求められます）した場合には、学生が安心して実践できるよう、教員も海外派遣におけるサポート体制を工夫しています（海外という特殊環境を選んだ場合は、人間的成長を促す貴重な場となります。しかし、危険性を孕んでいるのも事実であり、事前のアドバイス、カウンセリングを含め十分な事前準備に努めています。毎週のレポート送信の義務付け、活動状況の把握と交信の示唆を行っています）。さらに種々の局面において、プレゼンテーション能力の向上を図っています（自己の表現、研究内容の理解と表現、研究成果の的確な表出、体験の共有化、判断能力等。図1参照）。海外を初め学外の研究室に行く場合は、科学だけでなく、日本の社会、歴史、文化を積極的

図1



に紹介する機会に直面することがあるので、積極的にそのような機会を持つことも奨励しています。きちんとした評価制度（指導教員の直接評価が学生に伝わるように工夫しています。特に、日本ではこのような経験は少ないので、学生にとっては新鮮に受け止められています）を構築すると共に、直接の指導者が、知識習得、問題解決能力、意思疎通と表現力の獲得、協調性、学生の習得力の程度と将来の方向性を指示するよう工夫しています。

本取組では、知の創生の場にその一員として参画し実体験します。学生という均質な集団での交わりが中心の環境から、学生から見れば「異質な」人々の集まった研究室に身を置くことで、社会性と国際性が身につくと同時に、コミュニケーション能力の

獲得が可能となります。さらには、国際交流にも参加し、異文化に触れて、日本の歴史や文化の再認識、自らの趣味の発掘等にも取り組むよう示唆しています。

自らの意思を表現しない、自らの専門を選択できない学生が増えている中で、本取組に積極的に挑戦することにより、具体的な医学研究の意義を理解することができ、初めてその奥に潜んでいる現在の医学における問題解決に迫る経験が得られます。このことはチーム医療を実践するための研究マインドを持ち、若手を指導でき、倫理観を有する医療人育成に繋がると思われます。

求められるパラダイムシフト

本取組では、全員必修で3ヶ月という履修期間を設定しました。その実体験の結果を他の未経験の学生に披露し、情報共有する場を設定することで、その学年が全体として成長することを狙って、全学生に履修させます。このことこそが、卒業後の同学年間の情報共有化と密接に直結するものであり、彼らの将来の医療の実践に繋がるものです。しかしながら、関心の強い学生と自己犠牲精神に富んだ少数の教員の取組のみでは目的を達することはできず、この取組を実践するのは必ずしも容易ではありませんでした。取組に途中から参加した教員の中には、疑問を投げかけるものも少なからずいましたが、生き生きとした学生の動きを観察していると、共感して、逆に学生側から影響を受ける例も見受けられました。学生と教員双方のパラダイムシフトを必要とした取組でもありました（図2参照）。

図2

岡山大学医学研究インターンシップ

学生サイドのパラダイムシフト

1. 学生自らの意思で派遣先を選択
2. 明確な「個」の表現 (自分は何になりたいか?)
3. 情報の収集と取捨選択
4. 自己決定による自己責任
5. リスクマネジメント(特に海外派遣)

・ 仮想を脱し現実体験
 ・ 現実から理念を検証
 ・ 個の重視と知の創生
 (指導的立場の医療人育成のための最初の一步)

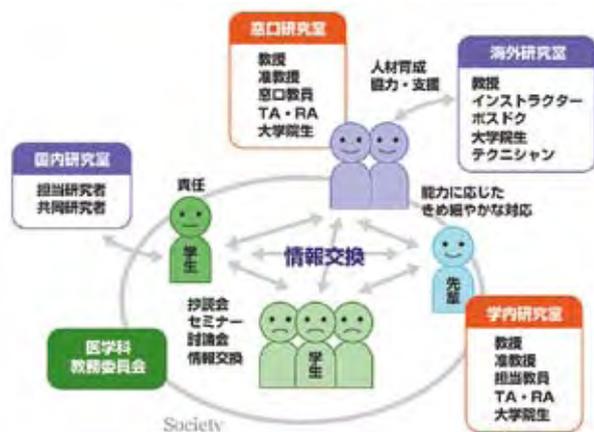
教員サイドのパラダイムシフト

1. 学生に選ばれるようなプログラム・配属先の提供
2. 魅力的でなければ人は来ない
3. 学生はクライアントである
4. 自分たちの生き残りをかけた取り組みである
5. 教育能力は高く評価される



毎年新しい学生が進級してくるので、毎年0からの出発であり、そのことを教員が認識することは大変重要です。また、屋根瓦方式の、上級生が下級生を教える制度を導入しました。この制度は、単なる情報の伝授ではなく学生の意識の問題にまで関わるので、時間と労力を要しました。学生を受け入れると、研究室では、時に全体で学生を歓迎し、また学生を取り巻く研究環境の整備、大学院生やTAも関与する研究技術の指導、科学的思考法や英語による研究分野の全般的指導、さらに海外の宿泊や生活指導にまで至る場合もあります。そのような研究の輪には、屋根瓦方式によって前年度や前々年度研究に参加した学生が加わります。即ち、派遣学生の教育指導には、多くの研究者が関わることになり、そのこと自体がチーム医療の実践にも類似した環境設定になっています(図3参照)。

図3



情報の共有化と学生自主運営の インターンシップ報告会

情報の共有化と日常的な話題提供はサロンを介して行ってきました。現段階では情報交換の場としてのサロンの整備は充分とは言えませんが、年間の会合数は30回を超えて、学生の間にも認知され、その機能は充実しつつあります。

情報共有化の最大イベントは、医学研究インターンシップ報告会です。3ヶ月間研究に没頭し、その内容を同級生に説明する機会、総ての学生が参加し、一日かけてポスターもしくは口演で発表を行い、お互いの研究内容及び成果を披露し合うのです。本年度は11月27日に実施され、臨床第一講義室とその廊下の壁への82題のポスター展示は壮観であ

りました。12題の口演発表内容は、その科学的レベルだけでなく、真に研究成果が伴っているものもあり、参加した教員からは賞賛の声が絶えませんでした。

この報告会を学生主体で組織・運営することを昨年提案し、昨年度の前哨戦に引き続いて、本年度はそれを実践しました。この組織構築に関わった実行委員の学生が費やした時間と労力は並大抵のものではありませんでしたが、その実行力と成果は計り知れないものでした。一つの学会を組織・運営するのと同じスケールのものであり、貴重な経験でありました。毎年異なった試みを行うことで、より学習効果が上がるかも知れません。

学年として成熟する3年次生

1年間で3年次生は学年として大きく成長しました。1年前に「何をしたらいいでしょうか」と言っていた学生が、自ら行った研究の意義や成果を朗々と口演あるいはポスター発表しているのです。それだけでなく、仲のいい同級生に、得意気に、しかし真摯に説明しています。個々の学生の意見をくみ上げるために、毎年独自のアンケート調査を行っています(これについては後述参照)。



新規の試みとどのような教育効果があったか?

体験 GP シンポジウム：3年間で8回開催しました。国内外から本医学研究インターンシップに関わりのある研究者、教授をお招きし、自らの経験談をはじめ、直接的なあるいは間接的な示唆、ご意見をいただきました。本年度の第7回シンポジウムは、学生の熱意あるメールのやり取りの結果、ジュネーブのWHO本部から進藤奈邦子先生の来学が実現しました。「これが私の生きる道—脳外科から内科、そしてWHOへ—」のご講演において、如何に医学

の中で自らの居場所を探し当て、獲得してきたかの貴重な例を提示されました。300名以上収容可能な臨床第



一講義室が、講演開始前から満席となり、学生から最上級の賞賛を得ました。また、第8回シンポジウ

ムとして報告会の中では、小野勝彦教授（京都府立医科大学）に『私の履歴書』と題する講演をお願いしました。学生の疑問を解決するような研究に対する独自の考え方を提示され、学生に研究に対する親近感をもたらし、魅了



していました。本年度初めての座談会は、学生の企画で行われました。基礎研究、臨床研究、社会医学行政分野の研究者が、如何に自らの医学を実践するかの実験談を複数の学生が尋ねる形式で行われ、おおいに盛り上がりました。

体験者の声：過去9年間における医学研究インターンシップ経験者の研究に没頭した実験談をHPに掲載しています。

何でもしゃべランチ：昼休みを利用した学内の様々な活動の紹介。GPサロン。

英語でしゃべランチ：昼休みを利用した Native speaker の医学に関わる英語のレッスン。GPサロン。

体験談 WEEK：医学研究インターンシップ経験者の自らの実験談を様々な形で表現する機会。これから医学研究インターンシップを経験する学生に対しての紹介の場となっています。GPサロン。

本取組の開始以来9年間に846人が医学研究インターンシップに従事したことになります。一学年平均96人が、学内69人、国内10人、海外には17人が配属になり、9年で計136人が海外の研究室で研究に携わってきました。

また、報告会当日、医学研究インターンシップのアンケート調査を行っています。記述式の回答とし

て、将来経験する学生は「自分で考え、仮説を立て、それを検証するという研究の過程を実際に体験してみたい」「研究に実際に携わることで臨床医とはちがう研究医の魅力を知る」という期待に溢れるものから、すでに経験した学生からは「受け入れ先の状況をもっと知って決定できればよかった」「海外中止組の次の配属先の枠が少ない」など、反省材料も存在しました。

9年間の取組における、直接の成果は、学生の関与した研究論文34件（筆頭4、共著23、謝辞7）と、国内外学会発表が70件（筆頭43、共同27）に及びます（HPに掲載予定 <http://medical-internship.com>）。学生自らが筆頭著者による口頭発表も31例を数えています。2001年に本取組を経験した学生が卒業後、ロックフェラー大学大学院に進学し、現在そのコース修了間近（学位論文が Nature Neuroscience 2009に掲載）の状況にあります。また、各医学研究インターンシップ終了直後のアンケート調査では、満足度94%を占めています。本取組の継続性に関しては、改善して継続という回答を含めると85%の学生が継続を希望しています。

このように学生に高く支持されている取組は、来年度以降もぜひとも継続していくつもりであります。高校までの画一的な教育から一転、大学では個人の強みを伸ばしていくことが求められます。これは自身の成長につながり、ひいては生涯学習につながっていく、医者としての大きな成長の波の一つと捉えることができます。このような時期にインターンシップを経て個を認識し始め、将来を模索してもがく頃にはシンポジウムの先人の言葉を思い出し自身のケースに当てはめることで飛躍につながり、更にはインターンシップで構築された人の環は、生涯に渡って自身を切磋琢磨する環境となり得ます。ここまでの9年間は、そのような環を構築するための人材育成の時期であったと言えます。これからの10年は、巣立った人材が医者あるいは医学研究者として再び環に還流してくる時期とも言えます。彼らと学部学生との関係を密にすることで、岡山大学発の、医者としての意義を心に抱き、地域医療から世界規模の医学研究に至るまで大きく発展させることのできる環が形成できると信じております。

大学の学びについて

～大学は人生の夏休みか?～

法学部 法学科 3年次生
吉野 みなみ

「大学時代」とは一体どのような時間なのでしょう
か。

このことを考えるにあたり私が大学に入学する前
に聞いた先輩の話の中に、「大学は人生の夏休みだ」
という言葉がありました。しかし本当にそうでしょ
うか。

ここでいう「夏休み」という意味が、「自由な時
間がたくさんある」ということならば、確かにそう
かもしれません。大学に入学し、多い日でも1日2
コマほどしか正規の授業は入れていません。また、
夏、春にそれぞれ2カ月ずつ長期休暇があります。
そのような点は、「夏休み」に似た要素を感じます。

しかし、自由な時間、自由な学びとは、意外に難
しいものです。

義務教育課程や、高校とは違い、大学では履修科
目を自分で組み立てることができるという点が大き
な特徴です。

ところが、この時間割を決めるということに、大
変悩ましい問題が含まれているのです。多くの選択
肢が並べられ、自分が学びたいものを選ぶことは
できます。ただしその際に、私達には、「では自分は
いったい何が学びたいのか」という問いが向けら
れることになるのです。ここで私達は、「なんのた
めにこの科目を履修するのか」という、講義とい
う「手段」に対する「目的」の設定という難題を
自由な学びという中から突き付けられることとな
るのです。

では、学びの目的の設定とは、どのようにしてい
けばよいのでしょうか。

このことに対して私は、大学での自由な時間を
生かし、多くの情報に触れ、様々な体験をし、思
考していく中で、見つけていこうと考えました。

たくさんある空きコマでは、講義の聴講や、自
主ゼミを行いました。様々な法システムを知る中
で、その奥深さや、また逆に、法だけでは解決
できない問題の存在も知り、よりよい社会を構
築することの難しさを改めて感じました。

サークル活動も、大切な学びの場であったと感
じ

ています。私は留学生ボランティアのサークルに
所属していますが、企画、運営は学生が行っていき
ます。そして、そこで出会った仲間のボランティア
や留学生達のもつ、自分とはまた違った考え方
に触れることができたことも意義深いものでした。

また、長期休暇には、岡山大学の交流協定締結
大学である、オーストラリアのアデレード大学
での語学（英語）研修プログラムに参加しました。
そこで裁判傍聴などの経験をし、現地の方と文
化や政治などについて話す中で、英語「を」で
はなく、英語「で」学びたい気持ちの存在に
気づくことができました。

他の課外学習では、法教育の一環として岡山市
の中高生と法律について一緒に考える「ジュニア
・ロースクール岡山」や、岡山弁護士会の方
々が行っておられる法律相談会にも参加させて
いただきました。そのような中で、私は法が人々
の幸せのための手段であることを知り、私も
その誰かの幸せを実現するために学びたいと
思うに至りました。

そして、法をただ学んでいるだけではその
実現を達成することはできないと考えました。
政治、文化、社会など、多方面から考える
ことのできる力を培い、よりよい社会づく
りに貢献したいという学びの目的を私は
設定することができたのです。

では、ここで、最初の問いに立ち返って
考えてみます。本当に「大学は人生の夏休み」
なのでしょうか。

「夏休み」という言葉が、「学ばない時間」
を意味するのであれば、違うといえるでしょう。
様々な人と出会い、多くの場所に行き、た
くさんの新しいことを見聞きする大学生活
の中で、常に私達は多くのことを「学」
んでいるからです。

過去を学び、未来に思いをはせ、そして、
より良い今とは何かを構想し、実現して
いく。それを繰り返すことで、学ぶこと
の意義を、その目的を学んでいく。それが、
その過程こそが、大学の学びなのでは
ないでしょうか。

体験的・大学での学びかた

社会文化科学研究科（法学部）教授
藤内 和公

自分の経験から、「具体的で効果的な学び方」とは何かを考えてみます。

第1に、文系では社会の動きに関心をもってほしいです。法学や経済学では現在の日本や世界の動きを念頭において議論しています。確かに講義では時間の制約から基本的なことが語られるにとどまりません。しかし、教員は日本と世界の現状を念頭におきつつ議論をしているので、法学や経済学を学ぶには、ニュースに関心をもって、何がどのように問題になっているのか、それについてどのような主張の対立があるのかを知っておけば、講義で語られていること、教科書に書かれていることと現状がどのように結びついてくるのか、いくらか理解しやすいかもしれません。

ニュースを見ていて、その時点では理解できないことも多いはずですが、そこは割り切って、「どこが理解でき、どこが理解できないか」を自分ではっきりさせておくと、つぎにその情報に接したときに、理解度が違ってくるはずですが。

第2に、感動を伴う学び方をしてほしいです。私は学生時代から現場を訪問し、関係者から直接に声を聞くことに努めています。たとえば、工場見学を定期的に行い、製造現場の変化を直に知るようになっています。また、学部演習のフィールドワークとして、ハンセン病療養施設・長島愛生園（瀬戸内市）や戦争中の毒ガス工場跡地（広島県竹原市）を訪問しています。こうした現地訪問で知ることの多くはすでに聞いたことのある話ですが、直接に聞くことの重みがあります。所詮卒業したら、たいていのことは忘れてしまいます。それでもなお記憶に残っていることがあるはずですが。教育においてはそれが大切なのです。

第3に、自主的な学習グループは学生同士が交替で報告し、お互いに議論し、教えあうという点で、

理解を深め頭に定着させるうえで大いに役立ちます。私の学生時代はクラス討論をよくしました。授業終了後にその時に課題になっているテーマについて、対立する主張を調べてきて議論しました。主張が激しく対立することもありましたが、自分たちで調べて議論する分だけ、記憶に残る程度は強くなりました。

第4に、心がけとして、長い目で見て役に立つ能力を身につけてほしいです。90年代半ば以後、企業の雇用慣行は大きく変わり、一つの企業に定年まで勤め上げることができるのは稀です。私の学生時代の友人をみても、法学部卒業でもやっていることは、どんどん変わっています。勤め先も出向などで否応なしに他社に移る者が多いのも、高度専門職でないかぎりやむを得ないようです。「学士の品質保証期間は3年、長くても5年」といわれるように、仕事で求められることは変化が早く、同じような仕事をしていても継続訓練は欠かせません。そうなる職業生活で大切なのは、担当が変わっても別の仕事をこなせる能力です。ある専門分野を勉強していても、その基本を押さえれば、他の分野の勉強にも活かせるものがあります。たとえば、文献などの調べ方、まとめ方、議論の組立方は、他分野の勉強でも通用することがしばしばありますので、それを意識して学んでほしいです。

最後に、「木を見て森を見ない」の弊に陥らないように心がけてほしいです。最初は各分野の基礎修得から始めることは必要です。しかし、知識が増えれば自然と全体が見えてくるというものではありません。意識的に全体の仕組みや構造、見通しを理解する努力をしないと、知識が多い「物知り」にとどまってしまいます。この点で社会科学にとって、人類の社会科学の巨人であるマルクスやウェーバーから基本的視座について学ぶことは多くあります。

自ら形づくる大学生活

環境理工学部 環境管理工学科 3年次生
石村 桂一郎

新入生の皆さんは大学という場所でどのようなことがしたいですか？ 大学生活というのは高校の時よりも時間がたくさんあります。自分の興味のあるサークルに入って楽しく活動したり、アルバイトをしてお金を貯めたり、今までとは一味違った生活になると思います。新しい生活に対して戸惑いもあるかもしれませんが、自然と慣れてくると思います。今回は「大学での学び方」ということで書かせていただきますが、これは学生一人一人で異なるものです。これから書く文章がみなさんのお役に立てば幸いです。

大学での「勉強」はよく高校での「勉強」と違うと言われますが、私は同じ意味だと思います。「勉強」は「学問につとめる」ということですが、その「学問」は「学び習うこと」です。何を学ぶかということ「一定の理論に基づいて体系化された知識」です。高校では知識を学びます。大学でも同じです。私は環境理工学部環境管理工学科に所属していますが、ここでも生物、化学、物理の知識を学びます。ただ高校と違うのは、大学は学生に知識を教授する場所であるだけでなく、新しく知識が生み出される場所でもあるということです。

社会文化科学研究科（経済学部）教授の榎本 悟先生が前年のOU-Voice (No. 11) で、「既存の知識（知らなかったこと）」を知ることは「勉強」の第一歩に過ぎないが、「勉強」にはそれに加えて新たな「知識の創造」という側面があり、これは「未知の知識（知られていないこと）」を知ろうと努力することである、とおっしゃっています。学問とは学び習うことであり、これにつとめることが勉強であり、勉強を続ける上で人は「未知の知識」を知り、新たな知識が創造されるということなのだと思います。

この文章は今私も考えながら書いているので難解

な話になってしまいましたが、残りは私の大学での活動を一例として紹介します。

私は現在3年生ですが、今年の8月くらいから岡山県久米郡にある美咲町境地区というところへ学科の友達と通っています。きっかけは中国四国農政局の方からのお誘いでした。境地区ではそばを昔から植えており、そのときはそばの種を播くお手伝いでした。10月には秋祭りがあり、獅子舞をしたり御輿を担いだりしました。獅子舞の練習のために何回か通っているうちに境地区の方と親しくなることができて、これが農村振興につながっていくのではないかなと最近感じています。手探りではありますが春からはこれをサークル活動としてやっていきたいと考えています。この活動は、中国四国農政局の方や先生のお力添えはもちろんですが、一緒にしてくれる学科の友達がいて初めて生まれたものだと思います。このような活動も時間のある大学生だからこそできて、大学での自分の勉強にもつながっていくと考えています。

最初にも書きましたが、「大学での学び方」というのは特に決まっていません。これは大学生活を通して学生自身が各々で身につけるものだと私は考えています。例えば、誰かが「大学での学び方というのはこういうものなのだよ」と言った場合、「ああ、そうなんだ」と簡単に納得しないで、自分なりに考えてみてください。これはとても大切なことだと思います。そして一番重要なことが最後になりましたが、友達とたくさん遊んで、楽しい大学生活を送ってください。

参考：榎本 悟：OU-Voice, Vol. 11, p. 11 (2009).

肩肘を張らずに自分流で、 でも初心を忘れずに

環境学研究科（環境理工学部）教授
三浦 健志

最近、高校生を対象にした出前講義や小学校の先生に講義をする機会がありました。その際に、多くのことを伝えようとして、難しい、覚えるのが大変という感想が寄せられました。受講生の前知識を判断する難しさを感じるとともに、難しいと受け止められた原因としては、大学での講義と高校までの授業の根本的な違いがあるのではと考えています。高校までは、講義で教えられることや教科書の内容は100%覚えることが要求されるのに対し、大学の講義は、少なくとも私が担当している講義では、その分野の基本的な知識と考え方を教えています。講義時に配布する資料や教科書・参考書は、あくまでも説明のための資料で、更なる勉強のためのものと考えています。大学での講義では、その講義で最も重要なところはどこなのか、という視点で聴いてもらえればと思っています。

講義の聴き方のアドバイスを一つ。講義内容が分からなくなった時どうするか、①分からないところは横へ置いておき先生の話について行く、②それでも理解不能の時はせっかく講義に出てきたのだから、一つでも覚えるところはないかと探す。それも不可能な時は③（教員としては勧められませんが）次に向けて鋭気を養う。私は他人に迷惑がかからないことは黙認しています。学生が関心を示すところでは居眠りをする者は少なく、怒るより反省です。

それからもう一つ。講義は復習より予習を勧めます。前知識の量で理解量は左右されますので。英語が苦手な私は、英語での話は一つの単語が分からないとそれ以降は頭の中に入ってきませんが、日本語では分からない単語が頻繁に出てきても、分かるところからまた頭に入ってきます。これは日本語では、分からないことを一時的に保存しておくメモリーが頭の中にあるためと考えられます。勉強することでメモリーの種類や容量を増やすことができるため、初めて学ぶことは、復習より予習の方が効率がよい

と考えられます。

色々なことを学ぶことは、頭の中の引き出しの数を多くし、考え方の幅や奥行きを広げます。高学年になると否応なしに専門の講義を受けることとなりますので、できれば1・2年生の頃は専門から離れたところを学んでおいてください。今後の人生に彩りを添えるものになると思います。

以下は、私の大学での学び方に対する考え方です。

勉強したいときに勉強をする。学びたいときに学ぶ。それが大学であり、それをサポートするのが教員の仕事だと考えています。勉強したい時といっても、講義の時間は決まっていますし、レポートも出されます。部活やアルバイトも必要です。その優先順位を自分で決める・決められるというのが大学生だと思います。

最近、勉強の順位が後回しになっている学生がよく見かけられます。勉強をするために大学に来ているのだろうが、と突っ込みたくなりますが、そんな時もあるだろうと放っておく、やる気が出るまで待つ。我々が学生だった頃はそうでしたが、教員となった今ではそうはいきません。如何にやる気を起こさせるかも教員の役割です。勉強を食事に喩えると、食欲不振の人にいかにか食事をさせるかです。まずは美味しい料理を作ります。料理の味は、一口食べれば判るものだけでなく、経験を通じてその良さが分かるものがあるので簡単ではありません。じっくり味わう必要があるもの、しっかり噛まなければいけないもの、不味が健康のために必要なものもあります。作るのは教員ですが、食べるのはみなさんです。料理の外見のみで判断することなく、色々なものにトライしてください。きっと貴方の口に合ったものが見つかるでしょう。

肩肘を張らずに自分流で、でも初心を忘れずに学生生活を過ごしてください。

大学での学び方

農学部 総合農業科学科 3年次生
狩野 典香

・大学と高校の違い

大学と高校の学び方で大きく違うのは、時間割を自分自身で決めることができるということだと思います。高校では決められた科目を決められた時間に学習するというのが当たり前であったと思います。しかし、大学では必修科目など最低限取得しないといけないものもありますが、基本的には自由に講義を選択することができます。学びたいと思えば、いくらでもその学びの幅を広げ、知識を深めることができるのです。

一方で、そのような自由があるということは、自分自身の責任というのも大きくなってきます。たとえば、ある資格を取得するには複数の講義の中から決められた単位数を取得しておかないといけない場合があります。その単位が足りなかったなどということはもちろん自己責任になります。あとで後悔しないためにも、目標はしっかり持ち、それに向かって努力できる環境をつくってほしいです。

高校の時は、ほとんどの人が志望大学に合格するという目標を持つことで大変な学習を続けてくることができたのだと思います。さらにそこには高校の先生の手厚い指導があったはずですが、大学に入学してその目標を失った今、新しい目標を自分の中に立てなければ、モチベーションを維持しながら学ぶことは難しいと思います。さらに、高校の先生から受けたような受け身のサポートというのは大学にはほぼありません。さまざまな情報を自発的に取捨選択し、岡山大学にあるサポートシステムをうまく使えるかどうか自分自身にかかっているのです。高校までは敷かれたレールの上を歩いてきたという人が多いと思いますが、大学ではほぼ確実に自分のレールは自分で敷いていかないとはいけません。

・農学部での学び方

農学部は現在一学部一学科制をとっているのですが、1年次に幅広い分野を学び、自分のやりたいことを

見つけた上で、農芸化学、応用植物科学、応用動物科学、環境生態学コースの内いずれかに分属することができます。そのため、1年次生のときから積極的に将来を考えていくことが必要だと思います。たとえば、入学当初は農芸化学に興味を持っていたけど多くのことを学ぶうちに興味をもつ分野が変わり、最終的には環境生態学に進む、というような人は少なからずいると思います。自分が興味を持ち、携わりたいと思える分野をぜひ発見してほしいです。

農学部で行われる講義では高校で学習したような内容も初めのうちは出てきますが、やはり、その内容はどんどん深くなっていきます。高校のように重要な語句を丸暗記しては、わからないことがイモづる式に増えてしまいます。なぜそうなるのか、どうしてその答えが出てくるのかをきちんと理解することが重要だと思います。そして、多くの知識を結び付けていくことで、それを忘れにくくなり、さらに発展的な内容を考えることもできるようになると思います。

しかし、時には勉強することの意義がわからなくなることもあります。実際私もそうです。そんなときはとりあえず取り組んでみるということも必要だと思います。その経験(知識的な経験や精神的な経験)は後できっと意味をもつはずですが。

・大学生生活

大学生活では、就職して社会人になってからではなかなかできないこと、大学生だからできること、たとえば旅行、サークル、部活、バイトなどをぜひやっておくべきだと思います。そのなかで得られた経験や知識はきっと将来、社会に出ても役に立つでしょう。

また、ぜひ周りとの“つながり”を大切にすべきだと思います。大学生活では、初めての経験や困難にぶち当たるのが必ずあります。そんな時、頼れる友人、先生、先輩などを持っておくときっと自分の支えとなってくれると思います。

山に登ろう

自然科学研究科（農学部） 准教授
西野 直樹

現在は高校生の約半数が大学へ進学していると聞きます。日本に帝国大学しかなかった時代は大学が真にエリート教育の場とみなされたでしょうが、おそらく現在の大学は誰もが行く、あるいは行ける場所と考えられています。大学ではどう学ぶ？ という問いには少々違和感を覚えますが、そのような問いがなされる状況を漠然と理解もしています。文系と理系の学生が一緒になり、夜を徹して哲学を語るという生活を大学に期待する学生はほとんどいないでしょう。メディアが将来不安を日々書きたてるので、無駄なことを避けてより良い職業選択につながる教育を効率的に受けたいと考える方が普通かもしれません。

とはいえ、大学は単に職業人養成を目的とした機関ではありません。大学の役割は人類がもつ知の継承と新しい知の創造とされ、それを実体化するため、教育とともに優れた研究を行うことが求められています。教科書に記載されていることを学生が「学ぶ」だけでなく、新しい知を体系化して教科書を「発展的に変える」ことが大学の責務なのです。世の中の仕組みや国の政策を変えるような、あるいは中学、高校の教科書を改訂するような発見や発明が理想です。専門書の内容を書き換えるだけでも実際は大変ですが、それを学生とともに体現することが大学における学びの目標でしょう。ただし、グローバル化した現代では新しい発見や知識が短期間のうちに世界中に広がります。これまでの記述を変えるレベルに達するだけでも、以前とは比べものにならないほど時間がかかるようになっていきます。

専門教育をなせもっと早く受けさせないのか？ 学生がしばしば抱く疑問の一つです。新たな発見や発明に必要な基礎知識は、どんどん蓄積してその頂を高くしています。山頂に達することができなければ、その先を見通すことなどできません。「素早く山に登るコツを教えてほしい。一心不乱に山に登れと学生を鼓舞する方が現代の競争社会に適してい

る」意欲と能力がある学生は、そんなことを考えているかもしれません。

もちろん、それを大学における学びとして実践することもできます。目標が高くはっきりしたものであれば、遠慮せずにそれを追求すればよいのです。プリオンの発見でノーベル医学生理学賞を受賞したプルシナー博士は、ストックホルムへの招待という山頂の果実を求めて脇目もふらず実験を繰り返したそうです。「出る杭を打つ」のではなく、「褒めて長所を伸ばす」ことの重要性を、私たち教員は何度も聞かされています。自分の適性はこちらだと考える学生がいれば、身近な教員に相談すればよいのです。

一方、偉大な発見や発明には『セレンディピティ』が欠かせないとも言われます。何かを探しているときに、探しているものとは別の価値を逃さずに発見する能力です。基礎学力をしっかりと身に付けたうえで、山に登りはじめてからも途中にある果実を興味深く観察しなければ価値は見出させません。ノーベル化学賞を受賞した白川博士が導電性ポリアセチレンを発見したきっかけは、大学院生が触媒の濃度を間違えて実験を失敗したからだといひます。予想と異なる実験結果に対し、「そこに面白いものがある」とひらめいた感性はセレンディピティの重要性を物語っています。岡山大学における学びは、どちらかというところセレンディピティを鍛えることに重きが置かれていると思います。

新しいことに挑戦する過程で生じる「価値ある失敗」を理解、あるいは評価できなければ、セレンディピティを鍛えることはできません。だから大学では、「価値ある失敗」を大いに奨励しているのです。実験研究における失敗だけではなく、友人との関係や他人への思いやりを学ぶことも、大学生ならではの「価値ある失敗（もちろん成功でもよい）」です。指示された授業の単位をとるだけでなく、キャンパス内外でチャレンジングな目標を設定し、多くの「価値ある失敗」を体験してください。

「大学における学び方」

— ラーニングチップス交換記 —



薬学部 創薬科学科 4年次生
藤田 真弓



医歯薬学総合研究科 (薬学部) 教授
竹内 靖雄



「はじめに、本特集のテーマである『大学における学び方』について、語ってください」



「薬学部では、薬学科と創薬科学科の二つの学科があります。薬学科は薬剤師になるためのコースで、創薬科学科は研究者を目指すためのコースです。それぞれ4年生になる際に各研究室に配属されます。入学して3年間、基本的な知識を授業で学び、そして、その中でも特に自分の興味、関心のある分野の研究室を選び、そこで、その分野を中心に実験を通してより深く学んでいきます。薬学科は薬剤師になるための授業がありますが、私が在籍している創薬科学科では4年生になると授業はなくなり、より専門的な知識や研究する姿勢を学ぶため、毎日研究室で実験をしています」



「研究室に入ってからは、今までと違うことが多く、戸惑うことばかりです。薬学部では、必修科目がほとんどなので、私は大学に入ってから、ただ授業を聞き、テスト直前に必死で暗記をするという高校と同じ様な方法で勉強をしてきました。テストはそれで乗り切ることができましたが、研究室に入ってからはそうはいきません。1番強く感じたのは『付け焼刃の知識では何も役に立たない』ということでした。①**研究室で行う実験は、模範解答というものは存在せず**、自分の持っている知識を基にして、様々な資料を参考にして考えていかなければなりません。そのため、ただ覚えただけの知識では『授業では聞いたけど、結局どういうこと?』となり、全く活用できません。また、授業もテストもないので、今までのように受け身でいることはできません。薬をしようと思えばいくらでもできますが、自分にとって何が必要かを考え、自発的に学んでいかなければ、手を抜いたツケは必ずいつか自分に返ってきます」



「実験を通して、教科書以外から学ぶことの多さにも気づきました。特に、『②**失敗から**

学ぶ姿勢』や『③**人から学ぶ姿勢**』が大切なのだと感じました。実験をしていると、操作が不慣れだったり、知識不足だったりして失敗することは多々あります。重要なのは、その失敗の原因を知り、同じ失敗を二度としないということです。また、失敗してから学んだことは、より強く印象に残ります。『失敗は成功のもと』という諺もあります。④**失敗したからといって落ち込むのではなく、『これで一つ賢くなれた』とポジティブに考える**ことが大切だと思います。また、実験操作のコツや勉強法などは、先輩が実際にやっている方法を見て、色々取り入れています。やり方は人それぞれなので、すべてを鵜呑みにする必要はありませんが、⑤**いいなと思ったものを少しずつ取り入れていく**ことで自らを向上していくことができると思います」



「大学に入り、環境が変わると、初めて経験することばかりで戸惑うことはたくさんあると思います。ただ、気負い過ぎずに、日々の授業を大切に、⑥**わからないことは放っておかず、一つ一つ解決**していくことが大切だと思います」



「(パチパチパチ・・・) すばらしい△。で、嬢はよそ行きのドレスアップをしていますか?」



「そ、そんなことはないです。でも、OU-Voiceに敬意を表して、ちょっぴりは・・・かな?」



「これまでの学び方は、試験や受験という御旗の下に、一義的な解答がある問題を解くことだけに慣れてきたのですから、①のように、正答のない問題を抱えると、さぞ、とまどうでしょうね。思い出してほしいのですが、大学で最も重要なことは、正答を見出すことではなく、『多様な価値観を認める』ことであると、初年次の頃から訴えてきたつもりですが・・・」

 「へー！そうでしたっけ？ 今初めて知りました。超スルーでした。なんか、最初から、ムズイことを言われているなあとは思っていましたが」

 「・・・▽。来年度から初年次教育の教授法を見直すことにします△。学びを、知識、技能、態度に分類するなら、『姿勢』は『態度』に相当します。そして、現在の教育で最も欠けているのは『態度』です。②のように、これを解決できるのが、『失敗』だと感じるのですね」

 「はい！」

 「③での『人から学ぶ』姿勢は、コミュニケーション能力の向上にも繋がり、シュウカツのスキルアップにも重要ではないでしょうか？」

 「御意！」

 「失敗は、つらい▽。特に、何時間も何日間も準備をして臨んだ実験を失敗すると、涙がでるくらい、つらい▽。さらに、『実験には再現性を、研究には個性を』が基本ですので、実験では成功と評価できても、研究としては失敗というのがあります。これはこれでまた、つらい▽。これらの失敗を、④のように、ポジティブシンキングで乗り越えているのですね。では、ポジティブシンキングを発揮できるコツは何ですか？」

 「まだ、実験でそんな大きな失敗をしてないのでよくわかりませんが…。私は心が折れたら、その日は早めに切り上げて、好きなものを食べて早く寝て、また明日から頑張ろうって思うようにしています」

 「『食って寝る』ですか。メンタルヘルスにも繋がるような良好な解消法ですね。⑤もまた、非常に共感できる態度です。一方で、先輩（時には先生も）の技術や態度の中には、共鳴できないこともメタボっていると思うのですが、どのように判断していますか？」

 「メタボっている…？ 自分の価値観で選んでいます。取り入れて何か違うな、と思った

ら次からまた別の方法でやってみます。それを繰り返していくうちに自分にあった方法が見つかると思います」

 「トライアンドエラーですね。まさしく、実験心得と同じです。⑥でやっと教員の出番がでてきたような気がします。『学びの主体は学生です。そして、教員は、そのサポーターです』。教員が可能な支援とは、どのような点と考えますか？」

 「単位をくれるのが1番ありがたいのですが…。大切なのは、学生と教員とが話をしやすい環境を整えることだと思います。聞きに行つて嫌な顔をされたら、次からその教授のところには行きにくくなります。ちょっとしたことでもすぐに聞けると、とても助かります」

 「引きつった笑顔なら得意ですが…。では、最後に、ちょっぴり意地悪な質問をします」

 「いつものようにですね」

 「・・・▽。大学教育にとって初年次教育が最重要課題のひとつです。実験や研究が態度教育にそれほど効果的なら、初年次から、研究的要素を取り入れた授業を多種多様に展開すればいいと思うのですが、これについてどう思いますか？」

 「確かに、薬学部は3年生から実習が始まるので、最初は不満でした。ただ、基礎知識がない状態でいくら実験をしても結局何も残らないと思うので、私は今のままでもいいと思います。」

 「ありがとうございました。本稿のご褒美は、ケーキっぽいのがいいですか？ アルコールっぽいのがいいですか？△」

 「もち、両方です△△」

 「・・・▽。ここは、ポジティブに『ごちそうさま』でした△」

OU-Voice 卒業生ページによせて

遠藤 寛子

フリーアナウンサー
(ラジオ：おかも朝まるミュージックアフター9「3月現在出演中」)
平成5年 文学部哲学科卒業



岡山大学を卒業したのは平成5年。その年に地元
の放送局に入社し、7年間そこでアナウンサーの仕
事をして、その後会社を辞めフリーになりました。
この仕事をして早16年。いつの間にかこんなに時
が過ぎ、大学時代の思い出もどんどん遠くなって
いっています。ただ、毎年秋には美しく色づく南北
道路のいちょう並木や部活動で通いつめたボック
ス、哲学という今まで触れたことのなかった学問と
向き合った学び舎など、今も変わらぬ景色を見ると、
確かにここで4年間過ごした、かけがえのない思い
出が少しずつよみがえってくるようです。

私がアナウンサーの仕事に興味を覚えたのは岡山
大学の学生として初めてその門をくぐった年です
。最初は単なる憧れであったのですが、部活動や
その後しばらくして通い始めたアナウンス教室で出
会った仲間たちに刺激も受け、少しずつその目標を
絞っていくようになりました。アナウンサーは募集
も少なく狭き門ではあるのですが、たまたま地元
の放送局でもアナウンサー採用枠があり運良く滑り込
むことができました。

ただ、実は生来のあがり症。入社してからも、緊
張のあまり思うようなアナウンスメントができず、
先輩から注意を受けては自分の不甲斐なさに涙を流
すばかりの1年間でした。

仕事ではそれまでの感覚と全く違い驚くことの連
続でした。放送では最後の1秒までを管理できな
ければなりません。在学中の成績はあまり良いとは
言えないものでしたが、それでも授業にはほぼ遅れる
ことなく出席していたつもりです。しかし、当然の
ことながら毎日の生活の中で“秒”までは気にした
ことはありませんでした。残り10秒で何を伝えら
れるか。この時間の感覚がなかなかつかめず、生放
送の緊張感の中でまた感覚がずれてしまい、身につ
けるまでが大変でした。(試しに今、10秒で何字
ぐらい言えるかトライしてみてください！意外と…
どうですか?)

そして、テレビカメラやマイクロホンなど決して
願ってくれることのない対象物に向かって、一人で

語りかけることの難しさ。新人
の時に感じたこの違和感は今でも
はっきりと覚えています。今でも“目の
前にいる人に語りかけるようにマイクに向かって話
すこと”はなかなか難しいことです。

年を重ねていくうちに様々な経験をさせてもら
いました。先の放送局がラジオ・テレビ兼営局であ
ったため、どちらのメディアの面白さにもふれるこ
とができたように思います。

映像をいかに上手くとりこんで伝えるかが決め手
のテレビと、映像がないからこそ聞いている人の想
像力で映像以上のものを時に伝えることができるラ
ジオ。ラジオでは例えば鍋のぐつぐつという音やご
くりと喉を鳴らしながら飲む音、沢庵などをコリコ
リと噛む音などをあえて伝えることで、映像がない
からこそ聞いている人が頭の中でそれらを思い描き
「食べたい、飲みたい」という気持ちになることも
あります。香りや味なども含めてテレビもラジオも
全ての情報を届けることができないメディアです。
だからこそどうすれば視聴者の皆さんにより多くの
ことが伝えられるか、そんな工夫をしています。

そして、アナウンサーの大きな仕事の一つ、インタ
ビューを通じて多くの方々に出会うことができました。
オリンピックのメダリストや地元岡山をひっぱり
政財界の方々、地域を元気にする活動を続けている
人、スポーツや趣味を楽しんでいる人、日々懸命に頑
張っている人…この仕事でなければ出会うことのない
数多くの方々に出会い、お話を伺うことができました。

皆さんそれぞれにご自分の言葉を持っていらっ
しゃいます。その短い言葉の中に歩んでこられた道
そのものが表されているように思います。その人が
経験し、考え、導き出した答えというのはその人だ
けのもの。これほど強いメッセージはありません。

今、皆さんの身の回りに起こっている一つ一つの
出来事も大切な経験です。どうか毎日を大切に過
ごされ皆さんにとって素晴らしい未来を迎えられます
ように。

岡山大学を卒業された方に、
本学在学生の方達へのメッセージをお願いしました。
皆さんの大学生生活に役立てていただければと願っています。



妹尾 真人

プロサッカーコーチ
(ファジアーノ岡山 FC ジュニアユースチーム監督 元トップチーム GK コーチ)
平成9年 教育学部中学校教員養成課程保健体育専攻卒業

教育から学ぶ

岡山大学教育学部を卒業して13年もの月日が経ちました。薄れつつある大学生生活の記憶ですが、日々努力を重ねた体育会サッカー部での活動は、今でも鮮明に思い浮かべることができます。私のポジションはゴールキーパーでした。専門のコーチがいない中、自分でトレーニングを考えメニューを組んでいく日々でした。さらに3年生の時にはキャプテンにも任命され、フィールドプレーヤーを含むチーム全体のトレーニングメニュー作成にまで関わることになりました。Jリーグサンフレッチェ広島のコーチが岡山に来ていると聞けば指導を見学に行き、ブラジルへのサッカー留学帰りの学生がいると聞けばトレーニングの詳細を教えてもらいにも行きました。トレーニングメニューの組み立てについては失敗することもしばしばで、毎日が試行錯誤の連続だったような気がします。当時は自覚すらしていませんでしたが、今思うとこの経験が、私に指導者の道へ進むきっかけを与えてくれたように思います。

岡山大学卒業後、大学で学んだことを活かし中学校教師の道に進みました。現役を引退してからも中学校部活動の顧問として長くサッカーに関わっていくことができそうだから、というのが大きな理由でした。実際、新卒2年目でサッカー部顧問に就き、中学生の指導にあたることとなりました。まだまだ現役選手としてチャレンジしたい気持ちもあったものの、実際に指導の現場を経験していくにつれて、指導の面白さ・奥深さを体感し、徐々に指導者の道へとめり込んでいったのです。

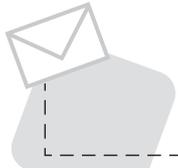
中学生という時期は、思春期真っ只中の不安定かつデリケートで、扱いの難しい時期であり、また、将来への無限の可能性を開花できるかどうかに関わってくる非常に大切な時期でもあります。したがって中学生の指導現場では、サッカーの技術・戦術等の指導はもちろんのこと、そういった指導を素



直に受け入れ、自ら考えることのできる人間的なベース作り、つまり、心の持ち方や落ち着いた生活といった指導が重要になってくるのです。サッカー部の生徒達は、多かれ少なかれ「サッカーが上手になりたい」という思いを持っています。その思いに対して顧問は、「サッカーを上手くしてやれる」ノウハウや「サッカーを上手くしてやりたい」という熱意を十分に持っていなければなりません。もちろん顧問の人間的な魅力、生き様や人生観が大きなベースとなるのですが、そこに信頼関係が生まれ、初めて心の持ち方や生活に対する指導が生きて生徒の耳に届くのです。逆を言えば、心や生活（off the pitch）の指導ができない指導者は、サッカー（on the pitch）指導も十分にできない指導者なのです。今思うと、11年間という中学校教師の経験がなければ気づくことさえできなかったかもしれません。プロサッカーコーチとなった今でも、「指導者たるもの教育者であれ」と強く胸に刻んでいます。

昨シーズンまで、ファジアーノ岡山 FC でトップチームの GK コーチとジュニアユースチーム（中学生チーム）の監督を兼任していました。指導対象こそ違うものの「選手を育てる」という視点は共通ですし、そのベースには「教育」というものが不可欠な要素であると感じています。特にジュニアユースチームといった育成の現場では、その割合が更に大きくなることは言うまでもありません。プロクラブの育成は、プロサッカー選手を育てるだけではなく、地域のクラブとして地域のリーダーを育てるという大きな使命も担っているのです。地域の教育力の低下、更には地域コミュニティの崩壊が叫ばれている今日、私たち Jリーグクラブが果たすべき役割は非常に大きいと感じています。この岡山のために、岡山の未来ある子供たちのために、少しでも力になれば幸いです。

※写真提供（2枚）：ファジアーノ岡山スポーツクラブ



海外の教育紹介

フランスの教育制度

フランスの教育制度は、深刻な病気にとりつかれ、死の危機に瀕していると言ってもいいほどです。こういった病気の原因を簡単に説明させていただきます。

社会文化科学研究科（文学部） 講師
ミシェル・ドボアシユ



統一中学校の失敗

統一中学校とは、1975年に生まれたものです。以前は、1) 就職活動の準備をさせる学校、2) 職業教育に進ませる学校、3) 高校進学を希望する優秀な中学生（割に少ない）向けの学校、という三種類ありました。しかし、教育制度を大衆化しなければならない、すなわち中学生を全て高校へ進ませなければならない、という声がますます高まったため、結局第一と第二の種類が廃止され、「統一中学校」という名前をつけ直した第三の種類だけが残りました。その結果、重要な問題が生じてきました。というのは、高校進学希望者向けの教育の内容がかなり抽象的で、理解しにくいから、授業についてゆける中学生があまりいないからです。個人的な経験に基づく例を挙げましょう。私は7年間、パリの郊外にある中学校で国語を教えたことがあるのです。国語と言えば、古典文学も勉強しますが、私の生徒の中には、字が全然読めない子供もいました。いうまでもなく、字が読めない生徒に古典文学を分析させるのは無意味なことです。確かに、カリキュラムが軽減されてきましたが、それでもできない中学生を救うのに十分ではありません。できる生徒が損をしただけです。つまり、「統一中学校」は大衆化の名のもとに、失敗と挫折を拡大させるものとなってしまいました。

学校地図の放棄

優秀な生徒がみんな同じ学校に登録しないように、フランス政府は1963年に、高校生が自分の住んでいる地区の最寄りの学校に通うべきだということを定め、所謂「学校地図」をつくりました。しかし、フランスではお金やコネさえあれば、法の網をくぐるのが容易にできます。したがって、「学校地図」はアツという間にただのひやかしの的となってしまいました。例えば、私の家の最寄りの高校は、麻薬取引で有名でした（高校生が授業中逮捕されることも何度もありました）。私の両親は裕福なので、中学校を卒業した私を公立の教育から取り戻し、評判のいい私立高校に入学させました。私の親友は、どうしたわけか家出をしたくなり、あるエリート高校の傍に住んでいる伯母さんの所に移りました。つまり、「学校地図」はブルジョアによって完全に無視され、経済的に恵まれない人々だけが従うようになりました。「学校地図」の目的は、学校間のレベルの違いをなくすことでしたが、失敗に終わってしまいました。2007年にフランス政府は、「学校地図」を放棄する事にしましたが、学校間の格差の問題をどう解決すればいいかということが未解決のままです。

バカロレアの無意味さ

フランスでは、高校生が卒業するために、バカロレアという試験を受けなければなりません。1970年頃は、18歳のフランス人の20%しかバカロレアに合格していませんでしたが、教育制度の大衆化のおかげで、合格率が63%に上がってきました。文部省によると、毎年受験生の80%が合格しているそうです。しかし、それは受験生の80%が試験問題に正確に解答できることを意味しません。実は試験問題をよく理解する受験生はあまりいません。「合格者のパーセンテージは80%」というのは、予め文部省が決めたものなのです。つまり、審査員は、受験生の80%を合格させるよう命じられています。例をあげるならば、私が審査員をしたとき、国語の口頭試験では、ある受験生に、哲学者のヴォルテールのテキストを解説させました。そのなかでヴォルテールは逆説的な表現で拷問の使用を非難しているのですが、受験生はヴォルテールのアイロニーがさっぱり理解できず、テキストを拷問の賞讃と誤解してしまったのです。それでも私はこのできない受験生を「良」で合格させました。なぜかというと、彼は大方の受験生と違って、少なくともある程度ましなフランス語である程度論理的に自分の考えたことを表現することができたからです。

こうしてバカロレアは、ほとんど無意味なものになってしまいました。フランスでは大学の入試がないため、生徒は高校を卒業すれば、すなわちバカロレアに合格すれば、自由に好きな大学に入ることができるのです。つまり、バカロレアはもともと、合格者が大学の授業についていけることを保証するものでした。いうまでもなく、バカロレアはこういった役割を失ってきました。今は保証されているのは、合格者が「ある程度ましなフランス語である程度論理的に」意見を述べるができる、ということだけでしょうか。

大学の混乱

フランスの大学は、学費がほとんどかからない国立大学であり、非常に貧乏です。そのため、70年代の

大衆化にともなった学生数の急激な増加に応じた設備を整えることができませんでした。私の通っていた東洋言語文化大学の状況は特にひどいものでした。学年が始まる10月には、教室が狭すぎるため床に座っている学生や廊下で立っている学生が少なくありませんでした。図書館は、一種の汚い物置に見えました。日本のように、政府が大学を独立させることにしましたが、大学がお金を持っていない限り、独立の話がどれほど冗談めいたものであるかがだれにでも分かるでしょう。それは、去年の激しい学生運動の原因の一つとなりました。

ただ、10月の狭すぎる教室が2月に広すぎる教室となるのは、例年決まって見られることです。バカロレアに無理に合格させられた学生は、大学の授業についていけないため諦めたり、試験におちたりして落伍するからです。去年の統計によると、大学生の50%が退学しているそうです。若者の高い失業率は、ある程度、こういった大衆化された大学教育と増大化する退学の結果です。大学の卒業者は大抵、失業者や教員となります。フランスでは、できる高校生はそもそも大学には入らないのです。彼らは高校を卒業し、さらに2、3年間一生懸命勉強し、いわゆる「グランド・ゼコール」(高等専門学校)の選抜試験を受けるのです。そして合格すれば、もう全然勉強しなくてもいいのです。卒業するのも、良い働き口が見つかるのも決まっているからです。つまり、「グランド・ゼコール」の存在が大学に致命的な打撃を与えていると言ってもいいわけです。そのため、大学と「グランド・ゼコール」との区別を廃止しなければならない、という声が上がってきましたが、いずれにせよ大学の陥った惨めな状態はもう絶望的である、という声も多く聞かれるようになりました。

日本に住んでいるフランス人はフランスと日本の教育制度をよく比較しています。とりあえず日本の方がましだという人もいれば、日本はさらにひどいという人もいます。皆さん、どう思われるでしょうか？

Gmail の利用促進について

総合情報基盤センター 客員教授
稗田 隆

岡山大学では、卒業生、退職教職員に対し Gmail を利用した生涯メールサービスを提供しています。在校生のみなさんにも Gmail による大学公式メールを提供しています。卒業後は同じ ID (メールアドレスの@より前) で生涯メールとして利用できます。

Gmail 導入により利用者には各種メリットがあります。

- ① Web メールであり携帯電話をサポートしているため、いつでも、どこでもメールの確認、発信が可能です (ユビキタス性)。
- ② 40 カ国を超える多言語対応で、大学の国際化に対応可能です。
- ③ 世界の ICT 業界の巨人、Google により最先端のサービス、技術が提供され、情報化社会の動向を感じることができるとともに、情報活用能力が向上します。

特に、項目③は、在校生のみなさんが最新の ICT の世界に接する機会として重要と考えています。

一方、セキュリティの脆弱なインターネットを利用することによる情報漏えいや、スパムメールの増加を心配される方もあるかと思いますが、Gmail は世界的に一步先のセキュリティ技術を提供しています。

それでも心配な方は、専門家が支援できる環境が

大学内に整っていますので活用してください。

そもそも、電子メールが世の中で一般的になったきっかけは、1999年2月に docomo が提供開始した i モードサービスからと思われます。実際は、当時の女子高校生が利用方法まで含めて、それぞれ docomo も想定しなかった利用を行ったことが契機になって爆発的に普及しました。

当時の有料の i モードは、「画面表示文字数が 25 文字程度で、新聞の 3 行広告的な使い方しかできないので普及しない」、との大方の反対を押し切って開始したサービスでした。携帯電話の表示能力の向上もありますが、今では i モード等が無い世界は考えられない方も多いかと思えます。

岡山大学が提供する Gmail は電子メールを中心とした、チャット(インスタントメッセージ)、スケジュール管理、ドキュメント管理、Web サイト (ホームページ) などの複合サービスシステムです。特に、ログイン後に表示するスタートページは、個人に対する大学からの情報表示、サークル間の情報共有など今後大学生活をエンジョイするためのポータルとしての活用を計画しています (図1参照)。また、個人で作成したガジェットの大学内での普及など、Gmail の新たな活用が生まれることを期待しています。

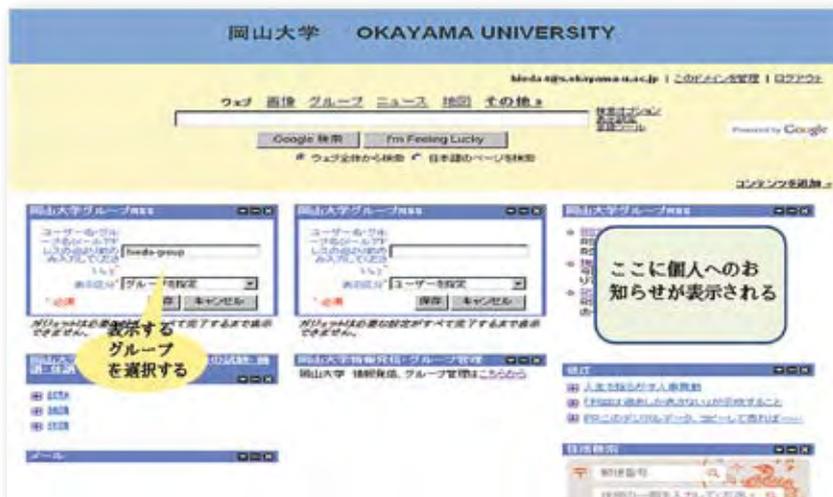


図1:Gmailのログイン時のスタートページ(ガゼットを3つ表示した例)

編集後記

第10号から連載の特集「大学ではこう学ぶ」シリーズも3回目にあたる今号で完結した。必ずしも意識されていないかもしれないが、大学には大学の学び方があり、高校時代の勉強法をそのまま続けてもうまくいかないことが多い。生涯学習時代といわれる今日、学びの方法を身につけることは大学教育を受ける上での手段というだけでなく、目標の一つとしても位置づけられるようになっている。

このシリーズでは学問分野による違いにも配慮して、岡山大学の全12学部・コースからそれぞれ学生・教員双方による学びの考察や助言を集め、見やすいようにそれらを見開きで掲載した。学生の皆さんはぜひ自分の学部に関連する部分を参考にして、自分なりの学び方を編み出してほしい。またシリーズ全体を通読していただければ、大学の各学部における学びのイメージをより明確につかむことができ、高校生の進路選択などにもお役に立つことと思う。今号までの3冊がいわば「保存版」として長く活用されることを望む。

教育開発センター 准教授 矢野 正昭

編集担当

教育開発センター広報専門委員会

成松鎮雄 橋ヶ谷佳正 紀和利彦 矢野正昭 天野憲樹 内藤賢一郎

表紙図案構成監修

橋ヶ谷佳正

学務部学務企画課

バックナンバー

- No.1 特集：「新カリキュラム・教務システムについて」
- No.2 特集：「上制限」
- No.3 特集：「授業評価アンケート」
- No.4 特集：「外国語教育の在り方」
- No.5 特集：「望ましい授業とは」
- No.6 特集：「成績評価の在り方」
- No.7 特集：「教養教育に求めること」
- No.8 特色G P 紹介、学生・教職員教育改善委員会活動報告 他
- No.9 新しくなる教養英語教育、現代G P 紹介 他
- No.10 20年度入学生から始まるGPA制度、特集：「大学ではこう学ぶ」 他
- No.11 学生支援の立場から見た教養教育、特集：「使ってみよう岡大eラーニング」 他

上記は、OU-Voice ホームページ

<http://www.okayama-u.ac.jp/tp/profile/ou.html>

よりご覧いただけます。

OKAYAMA
UNIVERSITY



OKAYAMA UNIVERSITY

岡山大学 OU-Voice 第12号

編集・発行

岡山大学教育開発センター 広報専門委員会

所在地・連絡先

岡山市北区津島中2-1-1 〒700-8530

電話：086-252-1111（代表） Fax：086-251-8440

E-mail：gkikaku@adm.okayama-u.ac.jp